トピック　カワウ

1. カワウの分類と採食行動

カワウはカツオドリ目ウ科に分類され、南米を除き世界に広く分布しています。日本でも、全国的に広く生息しています。

カワウは魚食性の鳥で、採食量は多いもので400～620gの記録があります。琵琶湖のカワウが食べる魚は、季節によって変化し、ハス、アユ、ウグイ、オオクチバス、ブルーギル、オイカワなどを食べています。

ねぐらから採食地の距離は、10～20km程度のことが多く、行動時間帯は昼間に限られ、主に早朝の2時間で採食するようです。

また、カワウは季節によって採食する水域を変えており、琵琶湖のカワウは、最長で熊本県まで移動したことが確認されています。

写真T-1　カワウ

2. 生息状況と被害対策

県内では1970年代にはカワウはほとんど確認されていませんでした。1982(昭和57)年に竹生島で5巣の営巣が確認された後、爆発的に増加し、2008(平成20)年秋には7万5千羽が生息していました。

採食行動により琵琶湖や河川の漁業に大きな被害が発生し、竹生島や伊崎半島では、巣作りのための枝折りや糞害により樹木が枯死するなど植生被害が出ていました。このような被害を防ぐため、河川では防鳥糸の設置などで採食を防止し、花火や鳴り物による追い払いなどもされています。また、大規模営巣地では銃器駆除によって人とカワウが共生できる程度までカワウの数を段階的に減らしています。

その結果、2024(令和6)年5月の調査では県内の生息数は1万8千羽程度まで減少し、竹生島では植生の回復も見られるようになりました。

これまでは、竹生島等に営巣地が集中していましたが、近年、内陸部への分散化による分布拡大が見られ、生活環境被害が顕在化してきたことから、新たな対策の検討が必要となっています。

写真T-2　竹生島の植生回復
(上:2008年7月、下:2016年7月)

自然環境保全課